

かがみやまこきよのにしきえ

加賀見山旧錦絵

〔解 説〕天明二年（一七八二）江戸薩摩外記座初演。容楊黛（ようようたい）作。大名家のお家騒動を題材とした時代物です。

〔あらすじ〕町人の娘ながら重用される中老尾上を妬む局岩藤は、鶴ヶ岡八幡への代参の折、言いがかりを付けて汚れた草履で尾上を打ち据えます。なんとかその場を堪え忍んだ尾上は、その草履を懐に館への帰路につきます。尾上に仕える女中のお初は、事件のあらましを他の女中達から聞きます。お家転覆の首謀者弾正が岩藤のもとを訪れ、お初は廊下で二人の策略を聞いてしまいます。

〔長局の段〕鶴ヶ岡での岩藤のいじめに耐えたものの、もはやこれ以上の辱めはないとした尾上は、自害を決意してお初を実家への使いに出します。主人の身を案じながらの道すがら、あまりの悪い予感に意を決し文箱の中を見ると、入っていたのは遺恨の草履と、尾上から両親への遺書でした。慌てて屋敷に戻ったお初でしたが、時すでに遅く、尾上は息絶えていました。お初は尾上が遺した岩藤の密書を手に、主人の仇討ちを誓います。

〔奥庭の段〕御殿の奥庭で、お初が岩藤を待ち受けていると、曲者がやってきて、何かを土中に埋めます。岩藤が現れ、指図通り若君調伏の品を埋めたことを確かめると、口封じのために曲者を殺してしまいます。お初は尾上が残した草履を岩藤に突きつけ問い詰めますが、岩藤は認めず、お初に斬りかかります。見事岩藤を討った

お初は、駆けつけた安田庄司にお家転覆に関わる密書を差し出します。庄司はその功を認め、お初を二代目尾上として中老役に取り立てるのでした。

(一般社団法人 義太夫協会発行)

長局の段

てこそ入にけり。

跡見送りて襖の蔭、お初がそれと抜き足さし足あたり

を眺め吐息つき

「デモ怖しい工みごと、お下りの遅い故、どうかかう

かと思ひ過ごし陪者の行く事ならぬ奥御殿、行て見よ

うとは思ふたれど咎められよか叱られうかと、取つて

返した襖の蔭、悪局の岩藤殿とあの伯父御の弾正殿だ

いそれた悪事の相談、コリヤ大切な事ぢやわいの、尾

上様に申上げお上への御忠節、ア、イヤ~~~~証拠

も持たず大切な事をなまなかに、これを訴へてお主様を科に落し、どの様な御難儀をかける企みの程もしれぬ、わしが大事のお主といふは尾上様より他にはない、

ヲ、さうぢや〜」

と一筋に恩義に迫る主思ひ、待つ間もどけし長廊下し

づ〜御殿を下る尾上、それと見るより

「ヲ、御機嫌よういまお下り、いつ〜よりも遅いお

下り、アどうやらお顔持ちもすぐれずお心悪うはござ

りませぬか」

「アノ初としたことが、けうとい物云ひ、毎日の御前

勤め下りの早い事もあり、御用が多けりや遅い事もあ

るはこの上まゝある事、勝手知らぬ其方故案じるは無
理ならずサア供しや」

と何気なき言葉にそれと気もつかず、上辺を包む上草
履、直す草履も昨日の遺恨、思ひ悩みて一筋に歩む廊
下も心には羊の歩み隙の駒、神ならぬ身のそれぞとも
知らぬお初が物案じ、いく間も遠き長局、部屋の戸開
けて内入りも常に変はりし顔色を悟られまじと癩に
まぎらし

「ありやうは先刻にから持病の癩が起こつたわいの、
夕飯もたべたうない、いつもの通りさすつてたも」

「はい」
とお初がさし寄つて、

「まづお枕を遊ばしませ、お風邪召すな」
と搔卷を、かひ／＼しくも立回り

「お癩の起こるもお道理様ぢや、それにつけても軽い

者は奉公とても気散じに、旦那様やら御家来やら、お
友達見るようにお心安うなさつて下さりや病ひ気も
ござりませぬ」

「ヲ、云やるとほり上々方の宮仕へはいかう心気を
遣ふもの。其方の父御は武士と聞いたが、世が世なら
どの様な御奉公も仕やる筈を町人の娘のわしが使ふ
といふは、さぞやさぞ心憂くも思やらうが、とかくに
人は時節を待ち花咲く春を待つのが肝心」

「ア、勿体ないこと御意遊ばすな、何事も大旦那のお
話にご存じならん、私親子が受けし御恩は口にも筆に
も尽くされませぬ。せめてもの御恩報じ無調法な私が
お傍でどうぞ御奉公とお願ひ申し、この春から初奉公
の御面倒有難う存じます。その大切なお前様が御病身
なをお案じ申し、どうぞお患ひの出ぬ様にと存じます
るが、年端もゆかぬ私が口からませた事を云ふ小癩者

ヲ、おかし、どりやお菓を見てこう」

と何か言葉に綾の糸、勝手へこそは立つてゆく。あとに尾上は胸せまり、忍び涙の淵も瀬も、明日はなき名を白紙に硯の海のそこはかと泣き長文も後や先、書置く筆の命毛も露と消えゆくはかなさを絶え入るばかり忍び泣き、涙とともに書留め、革の文箱も浦島が明けて悔しき遺恨の草履、文もろともに文箱の紐引締めて傍へなる手箱のうちを片見分け数も涙の玉櫛笥こま／＼しくも小文庫に思ひつめたる浮き涙包むに余る小風呂敷、中結び締めて玉の緒も今を限りの空結びに封もしどろにかきくれて胸に満ちくる血の涙袖に包みし思ひなり。何心なく勝手口、お初は心息せきと煎じ上げたる薬鍋、片手に茶碗たづさへ出で

「サアお菓」

と差出し、見れば包と文箱にキツと目をつけ

「これはしたり、お心悪いに何処へのお文お気が尽きように何事」

と問ひかけられてさあらぬ態

「イヤこの文は母様へ急に上げねばならぬ文、この包大儀ながらツイ往てきてたも」

とものがるに云ひつけられてもじ／＼と、どうやらすまぬ今日のだら不精々々に

「アノ参れなら参りませうが、アレ御覧じませ、空合ひも曇ってくる。勝手がましう思召しませうが明日の事にでもなされませぬか」

「テモ初とした事が、いかに心安だてとて主の云ひつける宿への使、明日の事にでもせいとは、いかに女の主なればとて、主の云ひつけを背きやるか」

「イエ／＼／＼何の御意を背きませうぞ、御持病のお癩も起りお顔持ちも悪い故」

「イ、ヤ癩気はもう癒った、日のたけぬうち早う行きや」

「ハイ」

「早う行きや、何をうじくするぞいの、行けと云はゞ行かぬか」

「ハイ只今参りますわいの」

と文箱とり上げ次の間の案じに胸も張葛籠、明けて出したる生木綿の在所染なる紋付の部屋方者の一張羅、帯し直して一人言

「今日に限ってこのお使ひ、行きともなうてく尾上様の御身の上が案じられてどうもならぬ、昨日鶴ヶ岡の喧嘩の様子、御殿いっばいの取沙汰を御存じないかわしにまでお隠しなさるお心の程がわしやどうも案じらるゝ、真実底から大切に思ふお主の大事を、こりやアノ虫が知らすとやら云ふのか、ア、心もとない／＼

御機嫌に違ふても往たふりして行くまいか、イヤ／＼どう云ふ急な御用やら知れぬ事をさうもなるまい、ヲ、かういう時の仏神様、さうぢや／＼とちり手水、一心無我の手を合せ

「南無観音様／＼、南無鬼子母神様／＼、お宿へ参つて帰りますうち、主人の身の上頼み上げます。どりや一走り走つてこう」

と小棲りゝしく高からげ錠口さして出でゝ行く。影見ゆるまで見送りて、堪へ／＼し胸の内、思はずワツと伏沈み消え入るばかり歎きしが、やう／＼に顔を上げ「まだ昨日今日、馴染みもないこのわしを大切に大恩受けた主人ぢやと年端もゆかぬ心から大事に思ふてくれる志、コリヤ恭いぞや嬉しいぞよ、岩藤へ遺恨を察しさつきにもよそ事に浄瑠璃の例へをひき、わしが短気な気も出やうかと云ひ廻したる健気な利発、いま

別れたが一生の別れとは知らずして、さぞやとつかは戻つて来て歎かん事の不便や」

と身も浮くばかりせき上げて前後不覚に歎きしが、やゝあつて顔を上げ

「父様や母様のこの年月のご不便がり御恩は海もなほ浅く山より高き御恵み、片時忘れぬお二人様この中のお文にも母様のこまごまと『いかうこの頃は、おしなべてひき風邪の流行病ひとしほ案じらるゝ程に、この守りは萩寺の厄病除けの御守り、傍輩衆も多い事悪い病の折見舞うつらぬほどに大事にかきや、またその上に身用心と云ふて他にはない、食べ物に気をつけて気鬱せぬ様に折節は酒でもたべて気を晴らし患はぬやう、第一は御奉公を大切に、また合ひ葉の黒丸子切れた時分』と気をつけて『もう二年で御年もあく、お礼奉公早ふして下りやるを指折つて待つてゐる』と小

さい子供か何ぞの様に成人のこのわしを大事がつてござるそのなかへ、あの文を御覽じたら何と身も世もあられうぞ、常に気細な母様のその場ですぐに死なしやんせう、今死ぬこの身より後の嘆きを見る様で胸も張り裂く悲しさは何の因果の報ひにて親子の縁の淡墨に書置く筆の逆事、必ずお許し遊ばせ」

と正体涙せぐりあげ身も浮くばかり取り乱す。

「アゝわれながら未練なり、女ながらも武家奉公、草履を以て面を打たれ、何面目にながらえて人に顔が合はされやう、とは思へども大切な御前様への忠義を思ひ今までは永らへしが、この書置に委細のわけ伯父弾正の悪事の密書、命を捨てゝ上への忠心ただ何事も宿世の約束、最期の晴れの仕度して一遍の経陀羅尼」
唱へんものと一間なる仏間へさして日も西へ、夕日まばゆき空色も磨き立てたる練堀づくりの足利家の裏

門口、文箱抱へ出るお初、形ふり見ずに息せきと行く
向ふより二人連れ、何かブツクサ話し合ひ来るもお初
が心の辻占、行違ひさま

「ア、叶はぬ／＼モウ叶はぬ、とつて返すがまだしも
の事」

「可哀い事をしました」

と聞く辻占にお初がハツと見やる空には一群の止ま
り鳥の鳴きつれて最期を告ぐる魂呼ばひ、心細さも身
にしみて、歩みもやらす立止まり

「ア、気にかゝる／＼、辻占の今の話、鳥鳴きのこの
悪さ、アレアレ怪しからぬ胸騒ぎはコリヤお宿へは行
かれぬわいの、様子は知れるこの文箱封じを切つて見
てのけう」

と思ひ切つて封おし切り見れば包みし草履片片、文取
上げて押開き

「何じや書置の事、コリヤ叶はぬ」

と懐へ一字も読まず一散に御門の内へと入相の鐘も
無情を告げてゆく、転んづ起きつ廊下口、半狂乱のお
初が仰天、部屋の襖も案内なく一間を見れば、こは如
何に、血に染つたる尾上が亡骸抱き上げてたゞうろ／

＼

「エ、死なしたり遅かつた／＼遅かつたわいのう、い
ま一足早くばナこの御最期はさせませぬ、コレ申し尾
上様、々々々、旦那様」

と呼べど答も涙より他に言葉も泣き沈む。

「笛のクサリを思ひのまゝ掻き切つてござるものを
何と答へがあるものぞ、ナニ御前様御披露、フムコリ
やコレさつきに伺ひ聞いた岩藤が密書、アこれさへあ
れば御身の明りは立つ有難い遅かつた、コレ申し御無
念の魂はまだ家の棟においでなされう、エ聞こえませ

ぬ遅かつたエ、聞こえませぬわいな、昨日鶴ヶ岡で岩
藤づらに草履を以てお打たれなされたその取沙汰は
屋敷いっぱい、御家来の私が身で口惜しうあるまいか
無念にはあるまいかなう、女子にこそ生れたれ私も武
士の娘、御鬱憤を晴らしかねうか、昨夜ひと夜さまん
じりともせず今日とても思案とりどり、もう打明けて
お話なさるか今打明けてお話かと、見合はしてみても
お隠しなさるゝ、エ、不甲斐ないお生れぢやと傍で見
る目の齒がゆくて、さつきにも浄瑠璃の例へをひきお
心をひいてみれば、塩谷判官の短慮なも無理とは思
はぬ尤ぢやと仰つしやったときのその嬉しさ、そのお
心に張りがあれば、天晴れお手は下ろさせぬと喜びは
喜びしが、ひよつとお前様が浄瑠璃の塩谷判官をなさ
れてはと、わざとお前をおなだめ申し、隙を見合せ岩
藤を一刀に刺通し御恩を報じ奉らんと思ふに甲斐も

今宵の有様、お書置のこの表、追付け仇岩藤が首引下
げて御無念を晴らさせませう、コレ必ずお待ち遊ばせ
と遺恨の草履手に取上げて打眺め／＼無念の涙血を
注ぎ、凝り固まりし烈女の一念、義女のその名を末の
世に錦と替る麻の衣、女鏡と知られけり。夜も早初夜
を告げてゆく御夜詰触れの音冴えて鉄行灯の光りさ
へいと／＼淋しき長局、胸なで下ろし手を組んで思ひつ
めたるその眼色、気も張り弓の三日月も入るさの影の
暗まぎれ、手水鉢にさし寄つて柄杓持つ手もワナワナ
と掬ひ上げたる水一口、恨みの草履片手には血汐滴る
尾上が懐劍、片手片足の早寝刃、庭の千草に鳴き告ぐ
る蛙の声も物凄し、辺り見回し奥の間へ真一文字に

奥庭の段

駈りゆく。

奥御殿の大庭先心も空も暗き夜に忍び入たる忠義の

一心、折節人もとだへしは天の与へと勇立ち、なを奥

深くうかがふ折から、はるかに聞ゆる人音に見付られ

てはいかがぞと、木かげにこそは身を忍ぶ。かく共知

らず太の男、目斗り出したる忍び姿、何か怪しの箱携

へ、傍りうそくうかがい足、かたへの大石掘起し、

土を穿て件の箱、土中へ埋め、手ばしかく元の如くに

取繕ひ、懐中より取出す笛、一吹ふつと吹立れば、兼

て合図や仕たりけん手燭片手に局岩藤

「お局様」

「ア、コリヤ、シイ。音高しく。兼て申付た事、首

尾よふ仕おふせたか」

「ハおほせの通り若殿調伏の一品、すなはち此の土中へ埋めましてござります」

「ヲ、出かしたく。大望成就の其の上は、いつかど

の武士に取立くれん。是れは当座の働き代、サ、近ふ

寄りやく」

「ハ、ア、コハ有難し」

と立寄る所を、抜く手も見せず只一討、其のまゝ息は

たえにけり。

「オホ、下郎は口のさがないもの、こうして仕ま

えば夜が寝よい」

とそしらぬ顔に行先へ、つつと出でたる腰元お初、さ

しもの岩藤ぎよつとして

「ヤア夜中といひ見苦しい下司女郎、其方は何者じや」

「ハイ私は中老尾上が召使ひの初と申す者でござり

ます」

「ム、そのまた召使ひが何用あつて此の奥庭へ」

「ハイ主人尾上こと相果てましてござります」

と、聞て扱てはと思へども、わざと上べに驚き顔

「ヤ、何といやる尾上殿は死なれたか、ヲ、夫はマア
／＼いとしやのふ、何病ひどふしたわけ、モ日頃仲よ
ふした人じゃにヲ、いとしやのふ。なむあみだ／＼南
無阿弥陀仏」

と、とのふる声は猫股の吠るより猶おそろしく、お初
はなほも、すり寄つて

「仰せの通り、これまで御親切になされて下さりまし
たあなた様へ御礼の為の此の一品、恐れながらなき後
の片見とも思し召下さりませと主人尾上の遺言、すな
はち此品御らうじて下さりませ」

と差出す帛紗の一包、合点行かねど手に取つて見れば
覚えのわが草履、はつと思へどさあらぬ顔、

「ム、此の土草履を自らへ片見に送るとおこしたは」

「とぼけさしやんな岩藤殿、昨日鶴ヶ岡にての一部始
終、それゆえに自害して相果てたる主人の敵、それば
かりでなし弾正殿と奥御殿で今朝の密談、まだ其の上
に今の先、曲者を手にかけてたる様子、何もかも知つて
居る。主人の敵お家の仇、サ、ハ、ハ、ハ、覚悟／＼／＼」
と詰めかくれば、

「ホ、ハ、ハ、ハ、ハ、ヤアちよございな下司女郎。大事
を知つたる上からは、おのれも生ては置かれぬ、観念
せよ」

と突かくる。心得ひらりと身をかまし

「主人の恨み受取れ」

と忠義の切先、悪女の懐剣、火花をちらしていどみ合、
念力通す恨みの刃、さすがの岩藤七転八倒、心地よく
こそ見えにけり。物音聞きつけ女中方

「スハ曲者」

と取巻けば、飛しきつて

「待った〜意趣は一人、お上へ手向ひ致さぬ」

と云へ共赦さぬ関の戸の『逃しはせじ』と争ふ所に

「ヤレしづまれ」

と声をかけ、立出る安田庄司。お初は臆せず懷中より

一通を取出し

「主人尾上、心をこめしこの密書、御披露願ひ奉る」

と差出すを、庄司取上げ遂一に読み終り

「ホ、初とやら出かしたり、主の仇たる岩藤をその場

を去らず打留しは武士も及ばぬ大忠臣、ことさら大切

なる此の密書、御上への忠節感ずる余り、今より取立

て中老役、その名もすぐに二代の尾上、血汐にふれし

その衣服早改めて御目見へ」

と、おほせにお初は有難涙、歩むも行くも夢の夢、主

は消れど名は朽ちぬ、忠臣義女の道広く、館をはなれ
出て行く。

※演者・時間等の都合により抜き差しがあります